
脅威の中毒性につき

妙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脅威の中毒性につき

【Nコード】

N77750

【作者名】

妙

【あらすじ】

ジタンはきつとかわいいもの好き。絶対。いやさ多分。そうだといい。

そんな妄想から生まれたネタ。

（前書き）

はじめての投稿です。

テストを兼ねてブログに乗せた小話を投稿したいとおもいます。

基本、兄弟甘々。

ブラコン最高。

自分の趣味全開ですので、充分にご理解いただけるようによろしく
お願いします。

「クジャ…」

ほら、また始まった。

ジタンのいつもの病気が。

「クジャ、あの…っ」

外に出ると…特に買い物などで一緒にいると、かなりの確率でこうなるんだ。

ジタンの視線はある一点に集中しつつ…だからこそ世話しく動いている。

「だめ。我慢なさい」

「じゃあっ、ほんのちよっとだけ…！」

必死に懇願する目。

今度は僕に向き直り、上目遣いで、頬は少し紅潮し、軽く眉を寄せ、潤んだ瞳で「だめ？」と主張する。

おねだりの顔。

全身全霊で首を縦に振りたくなるところだが、負けじと視線を外す。

「だめだよ、…そのまま連れて帰って来そうで怖いからね」

「そんなことしねえよ、な、頼む！ちよっとだけ…！」

何かを錬成するんじゃないかって勢いで、ジタンが顔の前で勢いよく両手を合わせた。

手袋とレースを挟むので、「ばふっ」というどこか情けない音がする。

ついでに本人の心中を物語るように、尻尾がもどかしそうにバタついた。

「……仕方ないね……」

結局、ため息とともにいつものように許可を出し、

「やった！クジャ大好き！！」
というお馴染みのセリフを聞いて渋々ジタンの後に次いで店の中に入る。

ペットショップの中に。

「お、あんちゃんやっとお兄ちゃんのこと説得できたみたいだね」
「すいません、あの子触らせてくださいっ」

「あいよ、さつきからずつと眺めてたもんねえ」

そういう流れを経てジタンの腕に託されたのは、生後数ヶ月程度の小さな子猫。

先ほどからジタンがガラス越しに熱烈な視線を送っていたのがこの猫だ。

小さな毛玉を受け取って満足そうに頬擦りをするジタンを、静かに見守った。

「可愛い…っ、可愛すぎる！クジャも見てみるよほらっ」

「…見てるよ」

あくまで傍目から。

ジタンがいつその四足歩行顔面舐め回し獣を、懷に仕舞い込みやしないかと見張っていないと。

ジタンと言えば、僕が一緒になって鼻の下を伸ばし、猫に触れて戯れないことを不満そうに猫へ「こんなに可愛いのにー？」と愚痴っている。

…というか、どうしてあいつはジタンの口ばかりを狙っているんだい？

愛情表現にも段階というものが…あ、今舌が入ったんじゃない？

「よし、アイルーと名付けよう」

「こら、飼わないからね」

「…こんなになつてゐるのに」

何をそんなに残念そうに。

「そいつはきつと誰にだつてそうするよ…それが仕事だからね。それにジタン、アイルーというのは種類であつて決して名前では…」

「こちよこちよこちよ…あはははは」

聞いちやいない。

今度から人の話は最後まで聞きなさいと、身体に教え込まなくてはいけない…。

怒りの方向が悩ましいのはいつものこと。

それにしてもペロペロペロと節操のない猫だ。そんなにジタンが美味しいのかい？

まあそれは最高に美味しいだろうね、だつて僕の自慢の弟なんだから。

今のうちに存分に味わつておくがいいよ、僕はいつだつてあの子のありとあらゆるところを愛撫しつくしてゐるんだから。帰ったら猫以上に執拗に

「なあ、おい…顔が怖いぞクジャ」

「…ごめんよ」

何を考えているんだ僕は。

「さあジタン、そろそろ帰るよ。うちには銀竜がいるんだから猫は飼えません。いいね？」

「……はい…」

至極残念そうにジタンがしよげる。

二匹の様子を微笑ましそうに眺めていた店員に子猫を預け、猫の尻尾とジタンの尻尾が同じようにたらん、と力なくうなだれた。

まったく、どっちがどっちなんだか。

「ジタンもあれくらい僕に積極的だったらいいのに」

「ん、何がだ？」

尻尾を嬉しそうに立てて、顔を突き出して、僕の口に何度も何度も思うがままのキスを……なんだ、いつもの情事じゃないか。

「なんでもないよ」

帰ったらさせるし。

「……？ならいいけど」

荷物持ちの銀竜に乗って家路につく途中。ジタンは猫に触れた幸福感のまま、機嫌よさそうに風に当たっていた。

「なあ、クジャはさ、猫を見て可愛い！とか触りたい！とか思わねえの？」

ジタンが満面な笑みで聞いてくる。それを一瞥して、

「思うよ」

と答えた。

「普通に、猫を眺めるだけたらね」

誤解のないように付け加える。

そう、猫が嫌いというわけじゃないんだ。ただその猫がジタンとあんな風に戯れてたりすると、なんというか我慢ができなくなる。

「普通につて……どういう意味なんだ……？」

本気で悩む弟を横目に、自分に対する言い訳を必死で考える。

そもそも、どうしてあんなに妬くのかと聞かれたら、ジタンが大切だからだ。

一番愛しいと思っているからだ。

「逆に聞くけれど……、どうしてジタンは猫があんなに好きなんだい？」

「可愛いからじゃねえか？」

曖昧な。

「可愛いかったら、抱きしめたいとか、頬擦りしたいとか、なんか思うだろ」

「確かにねえ……」

ジタンに言われると、同意せざるを得ない言葉だけだね。

「可愛いは愛しいか…」

「まあ、そうなるな」

「……僕は…どうなのかな…？」

いけない、つい口から出てしまった。

「は？」

なるべく平常心を装って顔を背ける。

背中のジタンがすぐに言われた意味を汲み取って、にやりと含み笑いをしているのが分かる。

「クジャ…もしかして、……猫に妬いた？」

「いいや、違…」

ぎゅう。

言い終わる前に背中から抱きつかれて銀竜の上から落ちそうになる。洒落にならなすぎて「危ないじゃないか」が出てこなかった。

「クジャは格別だろー」

背中に頬擦りしてくる愛しい子。

「ていうか…猫とは逆だな」

「逆って…？」

「猫はさ、可愛いから愛しいわけだろ？…クジャはさ、そうじゃない…愛しいから可愛いんじゃないかな」

衝撃の事実だ。

ジタンは僕を可愛いと思っていたのか。

背中に額を擦り付けたままなあたり、自分で言っていて自分で照れているに違いないけど、そういうのは世界一の可愛さには含まれないんだろうか。

「お前の場合、可愛いより綺麗派だけだな
それは自負してる。」

というか、さっきからこの子は僕を嬉しさか何かで発狂させたいのかな？

「そうすると、僕なら…両方ってことになるのかな」

ジタンが顔を上げた。

振り返って、頬が林檎みたいになっている状態のジタンを視界に捉える。

「君を愛しく思えば思う程、可愛らしく見える。そして…僕の弟は本当に可愛いから、尚更愛しく思う。更に言うなら、そんな君が僕を愛しく思ってくれることが嬉しくて、僕も君がもっと愛しくなる」
「あ、それは俺も嬉しいかも。そういうの…えっとなんていうんだっけな…」

そういうのはね、
相乗効果っていうんだ。

でも教えてあげない。
だってこれからそれを身を持って体感してもらってから。

ただいま、という台詞と共に屋敷の前に銀竜が降り立った。買い物荷物を2人で抱えて玄関のドアを開ける。

銀竜が自分の寢床へ戻っていく時に、何かため息のようなものが聞こえた気がしたが、
聞かなかったことにしておいた。

ごめんね、

バカップルが楽しすぎて仕方ないんだ。

(後書き)

猫ってかわいいよね。

でも自分家の猫は全然構ってくれないの。

だから妄想すんの。

あの柔らかい尻に、尻尾に、ああ、触りてえなあ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7775o/>

脅威の中毒性につき

2010年11月8日01時16分発行